令和４年度京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会（準備会）会議録

１　開催日時：令和５年３月３０日（木）午後３時００分～午後５時３０分

２　開催場所：京丹後市役所峰山庁舎　２０１会議室

３　出席者：

井上　知英　委員

岩本　　悠　委員

上田　隆嗣　委員

荻　　弦太　委員

古賀　稔邦　委員

高橋　一也　委員

田茂井 勇人　委員

竺沙　知章　委員

長井　　悠　委員

中川　　哲　委員

平野　佐世子　委員

牧野　光朗　委員

ヤング 吉原 麻里子　委員

大西　　徹　オブザーバー

塩川　達大　オブザーバー

椹木　教久　オブザーバー

（欠席者）

荻　　弦太　委員

中道　　浩　委員

事務局：

京丹後市副市長　　濵　健志朗

京丹後市教育委員会　教育長　　松本　明彦

京丹後市　市長公室長　　川口　誠彦

京丹後市教育委員会事務局　教育次長　　引野　雅文

京丹後市市長公室　政策企画課　課長　　松本　晃治

京丹後市教育委員会事務局 学校教育課課長 川村　義輝

京丹後市教育委員会事務局 教育総務課課長 溝口　容子

４　議　　事

（１）共通認識及び今後の検討事項（説明）

（２）委員発表（長井委員、岩本委員、中川委員）

（３）意見交換（本市が目指す教育・人材育成像の方向性、検討事項等について）

（４）その他

５　公開又は非公開の別　　公開

６　傍聴人　　なし

松本教育長：第２回「京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会（準備会）」の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。あらためまして、本日は、年度末の大変押し迫った時期での開催にもかかわらず、準備会に出席いただき、誠にありがとうございます。また、牧野委員、中川委員におかれましては、遠路京丹後にお越しいただいての参加、本当にありがとうございます。

さて、第１回目の準備会を先月実施させていただき、どんな教育を今後進めていくことが、京丹後市の子どもたちにとって、また京丹後市にとって必要なのかを本当に様々な角度からご意見をいただきました。私たちが考えていた内容については、まだまだ輪郭のはっきりしたものではありませんでしたが、委員の皆様のご意見によってかなり１回目にして輪郭がはっきりしてきたのではないかととらえているところです。

また、新たな視点として子どもたちの声もしっかりと聞き取り反映することの重要性であったり、今でなく１０年後を見据えた育むべき資質・能力を今

論議すべきというご視点、ご指摘、さらにはどの地方都市でも同じという教育でなく、この地域だからできるという京丹後という地域を明確にした特色のある教育・人材育成をという視点など、多くの気づきをいただきました。

本日はそうした１回目の論議を踏まえまして、事務局から「共通認識及び今後の検討事項」についてまとめたものを説明させていただき、その後、３人の委員の皆さんからご発表をいただくこととしています。本当にお忙しい中、資料等の作成をお世話になりました長井委員、岩本委員、中川委員に心よりお礼申し上げます。またこの後の発表についてもよろしくお願いいたします。

さらに、その後は本日参加いただいている委員の皆様から忌憚のないご意見をいただき、２回の準備会を終了させていただく流れとしております。

そして年度が替わりました４月からは、いよいよ正式な検討会として委員の皆様方には引き続きお世話になり、よりテーマを絞った論議をお世話になりたいと考えておりますので、重ねてどうぞよろしくお願いいたします。

結びにあたりまして、この検討会が京丹後市の子どもたちが京丹後らしく資質・能力を伸ばし、世界で、そしてこの地域で活躍できる大きなきっかけとなりますことを祈念しまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

事　務　局：ありがとうございました。本日は、丹後機械工業組合の荻委員につきましては欠席のご連絡をいただいております。また、オブザーバーの丹後教育局の大西様についても欠席のご連絡をいただいております。峰山高校の中道校長先生につきましてはご欠席ですが、代理でオブザーバーということで椹木副校長にご出席をいただいております。井上委員につきましては、ご出席の予定ですがまだお見えになっていません。追って見えられるのではないかなと思います。

続きまして資料の確認をさせていただきます。

（資料確認）

本日の会議につきましては、前回に引き続き準備会ということで事務局のほうでこの後の議事についても進行させてもらいたいと思います。（１）のほうで事務局からの説明をさせていただいた後、３名の方からご発表をいただいて、主にはご意見、ご質問は（３）の意見交換の中でお世話になれればと思っ

ております。ここで、教育長も申し上げましたようにこれまでの議論と、今日のお三方からの発表をもとにいたしまして、今後の検討事項等の方向性が協議できればありがたいと思っています。事前の説明は以上です。

それでは議題のほうに入らせていただきます。

（１）共通認識及び今後の検討事項（説明）【資料１】

事　務　局：(事務局説明)

事　務　局：ありがとうございました。事務局のほうから資料１の説明をさせていただきました。ご質問や、ご意見もおありかと思いますが、のちほど（３）意見交換の中で頂戴できればと思いますので、このまま（２）の委員発表のほうに移りたいと思います。今日は長井委員、岩本委員、中川委員に、それぞれ２０分程度ご発表をお願いしています。

早速ですけども、先ほど事務局のほうから申し上げました共通認識といったところも頭に置きながら、お三方の発表をお聞きいただいて、のちの意見交換につなげていただければと思います。

まず長井委員のほうからアントレプレナーシップに関する内容ということでご発表お願いできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（２）委員発表（長井委員、岩本委員、中川委員）

長 井 委 員：改めまして長井ですよろしくお願いいたします。弊社の話は前回も少し自己紹介でしましたけれども、アントレプレナーシップをテーマにしますので、社名に入っているタクトというキーワードだけ覚えておいていただければと思います。いわゆる指揮棒ですけれども、この場合は人生の指揮棒ということです。アントレプレナーシップという言葉に行きつく前に、自分の人生を自分で指揮できるようにと、主体性というところが大事ですよね、ということをしている会社であるとご記憶いただければと思います。また、弊社のミッションとしてグローカルリーダーを育てましょうという言い方をしております。これは先ほどの第１回のおさらいでも共有があるかなと思いますけど、世界、社会への進出はもちろん、京丹後市の良さであるとかふるさとを愛する心も必要ですので強く共感しているところです。

アントレプレナーシップ、にわかに令和４年度から文部科学省のほうからもいろいろもあって聞く言葉になったかなということですが、なぜ重要なのか

というところから触れていこうと思います。
よく聞かれるお話もあるかも知れないので、ここはやや早めにいきます。
時代理解という話ですけれども、例えば新型コロナウイルスであったりというところで、ワクチンの話であるとか、何が正解かみたいなことが分かりづらく、最先端の究明をもってしてもこれが正解ですと提示しづらい事象も結構起こってきている時代かなと思います。
ウクライナ情勢等に関しましても、遠くヨーロッパの地の話だなという印象もあったかも知れませんが、物価、為替等にもずっしりと響いてくるような、遠くの土地のことが我々のところにも波及してくるという、予測がにわかにつきがたいというところもある時代かなと思います。
教育に直結する話ですと仕事の話というのがありますけれども、スライドにありますとおり、同じ場所で１０年後に職の需要が全然変わってきたよねという話であるとか、そういったこともよく言われる話かなと思います。仕事の授業に代表されるように、変化のスピードが速い時代ですよねというところが言えます。
こういったことを総じていわゆる VUCA World という話がありますけれども、変動性、不確実性、複雑性、そして曖昧性といったものが強く出ているのが今の２１世紀かなというふうに思えます。このあたりは耳タコで皆さんお聞きになっていらっしゃることかなと思います。
そういうわけで、人生、昔ほど決まったルートがあるというわけではないということで言うと、生きていく人々それぞれの自分の意志、これは弊社は TAKT と読むと書いていますが、TAKT が大事ですよねというところが意識すべきところかなと思っています。
もう一度仕事の話に戻りますが、野村総研が出した予測があります。２０３０年時点でどういう働き方が主流になるかなという予測です。２０３０年時点で２０代になっている人々というところで、弊社としましては、だいたい弊社のプログラムに参加するお子さんたちが該当するのですけども、２０３０年時点でみんな２０代になっているよねと話していますが、そういう方たちの８割近くが副業・マルチジョブを導入する。つまり専業でなくなる。なので、もしかしたら平日の日中は会社員かも知れないし、それ以外は Uber

Eats の配達員をしているかも知れないし、週末は趣味の DJ で稼ぐかも知れないし。そんな複合的な働き方が求められるというのが今後の働き方なのかなと思います。

となると、どこかに就職しておけばいいという話ではなくなるので、よりこういったものについて自問自答して答えが得られる状態であることが大変重要かなと思っております。

そう考えると自分のことをよく知るということももちろん重要ですし、世の中、世界がどうなっているのかな、どういうニーズとか、問題とか、願いは、今世界、社会で流れを察知することもとても重要だというところで、距離を考えるという観点から言うと、この話を中高生にすると、だんだん顔が暗くなってきて、なんか考えることがたくさんあって大変な時代になっちゃったなというような印象を受けるようです。

弊社タクトピアとして言いたいことは、大変ということではなく、それだけ新しいアイディアや、新しいチャレンジが受け入れられやすい時代でもあるのかなということを、常に言っています。ただし、意志さえあればというところがあるかなと思います。ここはまさに教育に反映されるべき新しい潮流かなというふうに弊社としては認識しております。

そういったものに対して、もちろんあらゆる面で教育のチェンジが求められていると思っていまして、弊社としても、アントレプレナーシップだけが大事で、アントレプレナーシップが万能で、と言うつもりは全くないんですけれども、今回ご指名いただきましたのでアントレプレナーシップにあえて焦点をあててお話をさせていただいています。

そのアントレプレナーシップとは何かというところですけれども、にわかに言葉も出てきましたし、発音もしづらく私も４回に１回は舌を噛むんですが、アントレプレナーシップについて、弊社のスタンスとしては一歩下がって、先ほども申し上げたグローカルリーダーを育てたいよねというところからスタートしたいと思います。グローカルリーダーは、世界とも渡り合えて、地元を大事にすると一言でも言えるんですけれども、もう少し、グローバルとローカルを足し算してグローカルという言葉になっているわけなんですけど、もう少し拡大解釈したいなと思っています。

グローバルな活動というのはつまり、世界というだけではなくて、もう少し広げて考えると、いわゆる越境です。自分の住み慣れたところ、快適に思うエリアから一歩外に出て学んでいく活動がそれに当たるかなと思います。学びだけでなく仕事上でもありますが、ボーダーを越えて自分とは異なる文化とか分野に触れていく。つまり新しいものを獲得していくような活動というのがグローバルと言えるかなと思います。対してローカルのほうは、究極なローカルは自分自身であるということを弊社でも言っているんですけども、内側に潜っていく、内省的な動きとか、無意識に持っていたような価値観を自覚するような動きかなと思います。もともと持っている、あるいは地域に埋め込まれているものを改めて自覚してそれを大切にする。それをもって、日本人として、あるいは京丹後市出身の者として、意見を形成するといったことが考えられるかなと思います。これらの活動を合わせ持てる人材がグローカルリーダーと言えると思います。

弊社的解釈で言いますと、こういったグローカルリーダーを育てたいよねとなったときに、グローカルリーダーを駆動してくれるエンジンに当たるものがアントレプレナーシップだというふうに思っております。弊社が絵にしているものと言うと、いろんなスキルとかマインドセットとかあるんですけれど、例えば語学だって重要ですし、Liberal Arts の力大事だよねとか、STEAM の力大事だよねとかってあるんですけれども、アントレプレナーシップがないとそれらを駆動させることができないよね、というふうに捉えております。要するに武器がたくさんあっても、どういった意義、どういった目的に対してその武器、道具を使っていくかということが定まらないと宝のもち腐れだという意味合いです。

語義的な話を少し挟むんですけど、アントレプレナーシップってすごく言いづらい。英単語的にも多分言いづらい単語なんじゃないかと思うんですけど、もともとフランス語由来だそうです。アントレというのは英語で言うと Inter、インターナショナルで、プレナーは take するということなので、日本語的に直すと間を取り持つ者ぐらいの意味合いだそうです。もともと別に起業家という意味合いではないということみたいなんですが、では間とは何だという話なんですけど、何かと何かを取り持つということで、ここから少し私の解

釈が入っていますけども、まずは需要と共有を取り持つ。問題と解決策を取り持つ。あるいは異分野のアイディアなどを組み合わせて新しいアイディアを生み出すといったような、そういった間を取り持つニュアンスがあるのかなというふうに思っております。なので文部科学省のアナウンスでもありますけども、必ずしも会社を作りましょうという人材に特化した話ではないということが、語義からもわかるかなと思います。一言でまとめたら、異分野、異なる地域間を橋渡しし、世の中を良くしようとする思考行動の在り方があれば、それはアントレプレナーシップであると言えるのではないかと思います。

もう少し細かい話があるのですが、時間の関係でここはささっと行きますが、こういったものが持ち合わせられる人がアントレプレナーと言えるのではないかと思います。

もう少し簡単な問いかけで示すならば、いろんなニーズや願いを汲み取れるアンテナ、自分で立っているかなという自分への問いですね。自分がどう思っているのが大事にできるか。自分だけで悩まずチームワークできているか。あるいは京丹後市の将来、世界の将来についてこういうふうに進めていきたいというビジョンは皆さん考えられているかなど、こんなところが問いかけとして発するならば問える項目かなと思います。

左から矢印を指していますが、自分自身で行う領域、そして身の回りのコミュニティとして学校や仕事、そういうコミュニティまで広げて考えるべき領域、そしてその先にある社会、世界の領域というような、自分から世界まで一本串が通るような、そういった世界を横断するような考える項目、行動すべき項目があるという、そんなことがアントレプレナーシップがとらえる世界観かなと思います。

そういったアントレプレナーシップはどこで発揮するのかという話で、先ほどお話してしまったところもありますが、いわゆる起業はもちろん当てはまるというところがあると思います。世界に挑戦していくようなスタートアップもそうでしょうし、社会的企業、NPO とかももちろん当てはまると思います。あるいは地域ビジネスですよね。いわゆるスモール・ビジネスと言ったりしますけども、例えば京丹後市のリソースを使った新しい仕事を起こして

いくといったこともちろん当てはまると思いますし、士業も当てはまると思います。大事なのはそれ以外ですよね。今既存の産業があると思いますけど、そういった中で新しい事業を起こしていくようなところにもアントレプレナーシップは発揮のしどころがありますし、より基礎的な部分で言いますと、別に仕事を起こさなくてもというところです。今いろんな課題が山積する日本の都市、まちにあって、課題解決に寄与できる市民としてどう活動していくかというところが、一人ひとりにアントレプレナーシップが備わっていれば、非常にベースアップしていくようなところが本来寄与できる先なのではないかと思います。

意義とかの話をしてきたんですけども、どのようにそれを教育という分野に埋め込んでいくかという話です。

令和４年度にご覧になった方が多いと思われる、文部科学省の木の絵ですけれども、ここにいろいろなレイヤーで大目標から、上から下までいろいろ書いてありますが、実際どのように教育に反映していくかというと、アントレプレナーシップの醸成と発揮というカテゴリーに言及されております。オレンジの部分は弊社の考え方を反映したものです。醸成はもちろん大事で、発揮も大事なんですけど、小さい一歩でいいので発揮の要素を入れていかないと社会との接続を実感しないまま何か難しいことをやらされているという状況に結構なりがちだなと感じていまして、小さな一歩でもいいので、醸成と発揮をセットで行うことが大事だと個人的に考えています。それによって、アントレプレナーシップの感想が面白いな、社会とかかわることが増えて、結構チームワークって大変なんだなとか、解決策を考えるのって結構大変だな、あるいは解決策を試作品でつくってみたけどなかなか完成しなくて、そうすると世の中の商品って実はありきたりなものだと思っていてもすごいんだな、など、そういったいろいろな気づきにつながるのかなというふうに思っております。

これも弊社解釈ですが、そういった教育、学びの在り方ってどういうもいのなのか。こういうABCDというところがあると思いまして、単純な話ですけれども、横軸では、日程を集中的に行うサマーキャンプや週末講座といった集中日程型のものと、学校の探究の授業など、定期的に開催する定期開催型が

あるかと思います。そして縦軸では、上側はお題を提示する側、例えば、未来の携帯電話を考えようなど、枠が決まっていて取り組みやすいタイプ。下側は、身の回りで気になることから課題発見しましょうという、課題発見型があるのかなと思います。一般的に、集中日程でお題が提示される方が求心力は強いという所感があります。定期開催でかつ自分で課題を発見していきましょうという形態は、大変な状況も起こりうる。筋力トレーニングと一緒で、長く地道に続ける方がサステナブルに身につく度合いも大きいのかなと思います。そういったプログラムがあるとして、プラス、３つ目の変数として開催地をどこにするかがあると思います。

弊社の場合は、このアントレプレナーシップのプログラムのパッケージ化というのが令和４年度の中で都市圏の中で進んでいます。弊社的には「１０のＰ」フレームワークを使ってまとめています。これは先ほどのいろんな変数に入る形で、共通の教材から学びのプログラムを創生することができるというふうになっております。ここにいろんなキーワードが書いてありますけども、何となくご想像はつくかなと思います。最初は Passion から始まって最後は Pitch。Pitch というのは短時間で行うプレゼンテーションですが、要するに自分はどこに情熱があるかなというところからずっと進んでいって、最後それを他の方々へ効果的に伝えることができるプレゼンテーションまでをひと通り学ぶことができることになっています。以前未来の教室授業でこれを教材化してきたというところであります。

ここで弊社がやってきた事例を紹介します。

１つは高校さんのものです。実はこの２年間プログラムの１期生がちょうど終わったばっかりなんですけれども、Project: LEAP という名前のものです。これは当然先ほど申し上げていますが集中日程型と定期開催型がある意味組み合わさっているような、そしてカリキュラムの中にがっつり入っているタイプのものです。何が組み合わさっているかというと、クラスルームという探究の授業の中でアントレプレナーシップを学ぶものが行うものが２か年ついていて、時々力試しのように校外で行う活動がついている。実際にはベトナムに行けず、和歌山で開催しましたが、海外研修に行ったり、大会などで実践する機会を提供してきました。

あとここから２つは小中生対象のものです。１つは川崎市です。川崎ベンチャースクールという事業もやってきました。これは比較的集中日程型で、定期開催というよりは、夏休みとか秋のあたりまでの事業です。川崎市に住む、あるいは通学する小中生を対象に行いました。川崎市は明確にものづくりとかハイテクとかの企業を擁する都市ですので、イノベーションシティになっていこうというビジョンがあって、そこからおろされた教育の施策となっています。地元の企業との連携はもちろんのこと、ものづくりの力を強めてほしいだとか、そういった要件を反映したような状態でこのプログラムをつくりました。

実はちょっと年代は違うんですが、合同発表会では、違うところから来た子たちで発表をし合うので非常に刺激になるようで、お互い子どもたちは刺激を受けていたという印象があります。

この事例で最後です。昨日やっていたやつです。高知県土佐町の企画になります。探究キャンプまちづくり編というものです。この特徴は、比較的お題が設定されていて、未来のまちを発想していきましょうと。まちって自分たちでつくっていっていいよね。住みたいまちを自分たちで考えたらいいよねっていうスタンスでやったということと、それから人の交流ですね、これは土佐町の企画なんですが、半分は東京、大阪の都市部から小中生を呼びまして、前半はオンラインで一緒に学ぶということをやったのですが、昨日までの３日間、実際に渡航して、土佐町という土地の中で、土佐町のまちはこういうふうになっているよねとか、お互い当たり前じゃないことってあるね、など意見交換しながら、最終的にプレゼンまで辿り着いたというような内容になっています。これはやはり土佐町はどういうまちでありたいか。早明浦ダムがありますので、水との生活を非常に強く押し出しているまちですけども、そういったビジョンから発したプログラムということになるかなと思います。

これを最後のページにします。

もし京丹後市をベースに考えた場合というところですけど、強み・活かせるリソースとしては、やはり京丹後市特有のちりめんなどの伝統的産業、あるいはこれから恐らく観光などの復興が予測される産業がある。これはお題を

提示するという意味では非常に強力な、なぜ京丹後市でやるかというのは１つの強力なリソースだなと思います。また、高校の専門科が結構あるので、小中生を巻き込むとして、メンターとして巻き込み先の高校としてそれぞれの科というところが連携しやすいのではないかというふうに感じています。また、グローバルやデザイン思考等のプログラムが行われていますので、そういった組織があってこそできるということが多々あるのではないかと思います。

課題としては、前回のおさらいのところでお話いただいたと思いますが、地理的な制約は致し方ないという部分もあるのですが、先ほどの土佐町のようにオンラインとハイブリッド開催をするとか、遠隔地同士で連携をするというような、ある種学びの姉妹都市というようなことが推進できるとよいのではと考えています。それから、地域プレイヤーの持続可能な巻き込みということですが、これは善意に頼り続けるということだけではなくて、例えばアントレプレナーシップで言えば年齢に関係なく学べることではありますので、オープンスクールのような場をつくって、小学生からおじいちゃんまでいるみたいな、そういったことをやることで共通言語をつくっていって、雰囲気をつくっていくというのも面白いのかなと思いました。あとは、成果指標の話で、これもかなり重たい話題だと思うんですけれども、どう設定するのか、それから何年単位でするのか。前回岩本さんが少なくとも 10 年単位でしないと意味をなさないというお話があったと思いますけれども、そういったところも含めて必要かなと思います。

後述と書いていますが、弊社ではアントレプレナーシップの指標を EU のものをベースにとっていまして、今のところ中高生が多いのですけども、だいたい５００から８００ぐらいのサンプルがあります。いずれ具体的に公開できるものが提供できるかなと思います。以上です。ありがとうございました。

事　務　局：長井委員のお話をお聞きいただきました。ありがとうございました。

それではただいまのご発表に対してご質問がありましたらお聞きしたいと思いますが、皆さんいかがでしょうか。

委　　員：ご発表ありがとうございました。EdLog の中川と申します。情熱を最初にしっかりと引き出してというお話が大変印象的で、ご主催されているワークショ

ップという単位と、京丹後の小学校中学校全部って考えたときに、どうやってスケールさせていけるかなというふうに思いながら聞いておりまして、何かアイディアなりお考えがありましたら教えていただけますと幸いです。

長 井 委 員：そうですね。お前のパッションは何だよっていきなり聞くのはあまり良いステップではないと言いますか、核心に近づくまでに細かい問いであるとか、回収できる、生徒さん一人ひとりが持っている事実みたいなことから進めるのがいいのかなと、手法としてはそう考えています。

日本の小中生がやっているワークの中で、そういったパッションの洗い出しに使えるものが既にあるような気がしていまして、例えば夏休みの日記とかで、自分の感情が反映される記述というのが本来あると思うんですよね。そういったものをベースにしながら、じゃあいつ自分はポジティブな感情が巻き起こっているのか、あるいはネガティブな感情が巻き起こっているのかというようなところを抽出していくというのは、まずファクトを取り、そのあと自分が感情の上下に判断したなら抽出するというような、一気に高度な思考を同時に回すようなワークにはせずに行うことができると思うんですね。そういったところを連携できれば、それぞれ京丹後市の小中生が、どういったことにパッションを持ちそうかということを行うのは、比較的スケールはしやすいのではないかと個人的には考えています。もちろん先生方へのご説明や、趣旨のご理解といったことは丹念にやる必要はあると思いますが、まずそういうようなイメージを持っています。

委　　員：ありがとうございました。牧野です。土佐町との連携の話ですが、土佐町との関係で何かきっかけがあったところかということが１つです。なぜ土佐町が小中生の学びの場として選ばれたのか。もう１つは、京丹後市の場合、高校との連携の話が最後にちょっとだけあったんですけど、実際に小中高で連携した事例があったかどうか。

長 井 委 員：土佐町さんは、以前高知県庁さんのほうで企業促進の仕事を弊社のほうでやっていまして、その関係でいろいろな人とのつながりがあったということがスタートです。どちらかと言うと大人の世代の企業の分野からではありました。言えることとしては、町あるいは県がこういうふうになっていきたいという話の中で具体的な自治体の方ともつながったという経緯というふうに言

えるかなと思います。

小中と高校の連携のところですが、これは個別の文脈、分からないところがあるんですけれども、もしかしたら初年度というところでは川崎のようにある時期で一気に短期間で行ってしまうほうが、まずは連携の基盤がつくれるのではないかという気もしています。カリキュラムで入っていくのはもちろん継続的ではあると思います。

事　務　局：長井委員、本当にありがとうございました。ほかにもご質問があるかたがおありかと思いますが、時間の関係もありますので次の発表に移らせていただきます。

続きまして、岩本委員様のほうからご発表をお願いしたいと思います。

岩 本 委 員：時間も押しているようなので、手短に終わらせたいと思います。

私は地域・教育魅力化プラットフォームという財団の代表をさせてもらっているんですが、基本的には高校の教育をより良くしていこうという取組をさせてもらっています。

背景としては前回も紹介させてもらいましたが、私は海士町というところで町の教育委員会に８年ほど、今は県の教育委員会で９年ほどさせてもらいながら、都道府県立高校をどう魅力的にしていくかということをやってきています。今日はそのポイントみたいなものを少し紹介させてもらえたらと思います。

地域における教育、人づくりというときに、だいたい幼保小中高と、あと１８ぐらいは高等教育機関がない市町村から子どもたちは巣立っていくと、京丹後市もそういった状況だと思います。そのときに、幼保小中のところは割と様々な地域との連携だとか特色ある教育でできるのですけども、高校段階というのは教育政策の空白地帯というふうになりがちだと。都道府県立高校、全日制高校、普通科といったところは特になりやすくて、だいたいそういった高校がこの地域における最後の３年間を過ごして、そこから地域の外に進学や就職で出ていって、その後帰ってこないという人財排出の出口になっているようなところが高校段階というところかなと思います。

人財排出の出口から、人財還流とか関係人口創出というところから見ても、要所だというふうに捉えて、今まで市町村からは都道府県立高校になかなか

アプローチができなかった時代が長かったと思いますけども、そこをどう協働しながら、地域の子どもたちを設置者の分断を超えて育てていけるのかというところに取り組んでいるところです。

事例のほうを少し紹介させていただきます。

私がいた町の県立高校ですが、少子化で生徒数も減り、学級数も減るというような段階でした。そこで、生徒がやっぱりここの学校で学びたい、保護者も通わせたい、教員もここで働きたいと思って異動してくる。地域もこの高校をなんとか活かしていきたいと思うような魅力ある学校をつくっていこうという取組をその地域で、３つの町村で１つの県立高校でしたけども、その県立高校を巻き込んで取り組んでいこうという動きをしました。

そのときに、まず何をしていったのかというと、今日のような会議はまさにそうだと思うんですけども、都道府県立高校と地元の町村や卒業生、民間団体を含めて、ここでワークショップと言うか、議論、対話を重ねながら、この地域の子どもたちにどんな若者に育ってほしいのかという若者像だとか、そのためにどういう教育をしていきたいのかという、教育や学校のビジョンというのを、多様なステイクホルダーと一緒につくるというようなことをやっていきました。

高校の中にコーディネーターを配置し、一緒に議論していったり実働していくための体制というのも構築しながら進めていきました。

その中で出てきたビジョンというのは、先ほどのお話とまさに重なるところだなと思いましたけども、地域の課題とか、地域のこれからとか、願いとか、対話をしていく中で生まれたのは、やっぱり地域で自ら生業だとか事業とか産業をつくり出せるような人材、若者を育てていきたいと。それにはある種のことを起こしていくような精神、アントレプレナーシップや、グローカルなマインドセットというようなところというのが当時、もう１５年前ですけども出てきたということです。

高校を卒業すると９割以上が外に出ていくのですけども、ほとんど帰ってこないと。どうして帰ってこないかというと、帰りたいけど仕事がないから帰れないんだということを卒業生たちも言っていると。そこを、仕事が少ないとか一次産業・二次産業が苦しいことを知っている、だからこそ自分たちが

帰ってきて、この地域のいいものを世界にも発信して、もっと多くの人たちに来てもらいたいと。仕事がないから帰れないのではなくて、仕事をつくりに帰りたい。もしくは仕事をもって帰ってきて、ここで続けていくという、都会じゃないと仕事がないとかではなくて、今はオンラインとかある中で、ここだからこそできる生き方や暮らし方や働き方を、自分らしくしていきたいと思って関わっていく、もしくは将来的には帰ってくる若者を育てていきたいねというのが、当時の議論の中で生まれてきた人材像でした。

当時それをブーメラン人財育成とみんな言っていたんですが、なぜかというと、子どもたちが卒業して出るときに、なるべく近くにいてほしいなみたいなので、近くの都市部ぐらいだったらみたいなことを言っていくと、その辺に出て全く戻ってこないと、高校を卒業して外に出るというときには東京だろうと最前線に行ってこいと、海外だっていいんだ、というふうにその子がやりたいこと、興味があることの最前線に思いっきり行ってこいと言って、出させてやると。ブーメランですので、思いっきり遠くに投げれば勢いよく帰ってくるかも知れないというところで、全然違う異質な外に出ていったときに、初めて今まで自分が生まれ育ったところの価値や魅力に気がついたりというのもあるということで、出るときは思いっきり送り出そうということをやっていったというところです。

そういった若者の資質能力を育てるためにどうしていくのかということで、学校の中だけでなく地域全体をフィールドにした学校というふうに捉えていこうと。地域様々な専門人材とか面白い人たちもいると。その人たちも先生として子どもたちの教育に関わってもらうと地域事業様々ありますけども、地域には課題があります。課題というのは絶好の課題発見解決型の学習における教材になると。リアルな課題、これこそが素晴らしい生きた教材になるので、これを使っていこうと。ICT もあるので、外の情報も当然取り入れながらやっていこうということで、今、探究と言って様々行われていますけども、様々な教科、科目の中で地域に出ていって、自分たちが見つけた課題を解決したり、魅力をもっと新しい価値に変えていきたいというようなプロジェクトだとかを立ち上げていろいろとチャレンジをしていくと。

その中で、高校２年生は全員当時はシンガポールでしたけども、ここと全く

違うような場所も体験させてあげたいということで、県立高校でしたけども市町村がお金を出して補助をして、どんな経済的な状況の子であっても全員越境経験をできるようにということで出してやっていました。行った先の、シンガポール国立大学とかで、自分たちの地域のプレゼンテーションをしたり、自分たちのやっているプロジェクトを発表してそれにフィードバックをもらったりとか、自分たちのやっているプロジェクトで、福祉のことだったら現地の福祉はどういうことをやっているのかというのをリサーチに行ったりとか、そんなことをやっていくということです。

やっぱりそういう経験をしてくると、例えば世界ジオパークになったと地域の人は喜んでいたけど、海外に行ったら全然知られていないじゃないか、もっと発信しないとだめじゃないかというので、自分たちで動画とかプロモーションムービーみたいなものをつくって世界にも発信していこうとか、自給自足ができるようなエネルギーを研究していきたいという中で、じゃあデンマークではどういうふうにやっているのかとか海外の企業ともつながりながら、地元の行政と一緒にエネルギー生産の計画づくりをやっていくとか、そんなことを高校生たちが、授業だとか、あとは放課後や土日にもっと活動したいというふうになってくると、部活動みたいな枠組みをつくって、やりたい子どもたちができるようにというのでやってきました。

この高校の生徒たちは、基本みんな同じ町村で生まれ育った子どもたちばかりという中でどうしても関係性が固定化して同調圧力が生まれるというような環境でしたので、なかなか多様な人たちと協働するとか、そういった力はなかなか身につきにくいし経験数は少ないというところでしたので、逆に全国とか海外から意志ある脱藩生を募集しようと。この地元の高校に行っても多様な人たちと価値観やバックグラウンドを持った子たちと切磋琢磨できるというような環境をつくろうということで、先ほどの話でいうと越境生みたいなものですね、受け入れていくというようなことやっていったりしました。そんな取組をする中で、結果的に高校生たちも、プロジェクトなんかみんなうまくいくわけではないですし、失敗もたくさんする。今の自分ではできないことがたくさんある。だから、もっと学ぶ必要がある。もっと成長しないと。もっとできる自分になりたい。そのために進学をすると。そういう目的

意識を持った子たちが結構激増していったというところで、結果的にいろいろな難関大学とか、海外にいくような子たちも増えてったというところです。少子化でどんどん生徒が減っていましたが、外からこの学校に入りたいと言って来る子たちが増え、高校段階から入るのは倍率が難しいとなったら、小学生、中学生連れて、教育移住、転住してくるという感じになっていったというところで、地元からこの高校に入ってくる割合が増えたり。あとで見てみると卒業後のＵターン率も高まっているというところです。

都道府県立高校なんだけど、市町村がコーディネーターを配置したり、受け入れるための寮みたいなものをつくったり、市町村がそういった取組をどんどんやっていったわけです。結果的に人も増えたり、子どもたちの数も増えたりしていますので費用対効果は５年後ぐらいから高い状態になっているということも見えてきたと。

そのあと９年ほど島根県のほうで、ほかの地域でもそういった取組をしたり、ほかの高校でもやりたいというところが増えてきたので、そういったところを支援するという取組をやっていきました。結果的にそういった取組をしていくところの生徒は、社会課題を何とか自分たちで変えていきたいという意欲が高い。うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む。アントレプレナーシップに近いものかも知れない。難しいことでも失敗を恐れないで挑戦することも非常に高く伸びていますし、将来自分の住んでいる地域のために役立ちたいという気持ちも強くなっていると。

そのときの卒業生、６，０００人ぐらいの卒業生を見てみると、将来も関わり続けたいとか、帰ってきて仕事をしたいという思いを持つ子たちが増えていくというようなところです。

今、全国の、今年から１００自治体を越えていますけど、そういった高校と一緒に取組をさせてもらったりしています。その中で見えてきたポイントを紹介して終わりにしたいと思います。

都道府県立高校と地域ですね市町村、大学、産業の連携協働、あと教室の中、教科の中の学びだけでなく、それとその社会とのつながりを感じられるとか、地域を窓にして社会や世界とつながっていく、学んだことを社会で実際に活かしてみる、いろいろな体験をしてもっと学ぶことが必要だと感じて教科の

学びに帰ってくると、こういった循環を引き起こしてく。
それが同質性の高い集団だけだとなかなかそういった気づきだとか深い内省が起きにくいというところに異質性を取り込むということで、越境していく、もしくは越境生を受け入れていくという、こういう組み合わせというのが、うまくいっているところに共通するポイントだということで、越境学習ですとか、それをつなぐために、コーディネートする人材の必要性とか、それを仕組みとしてやっていける体制づくりというのがポイントになってくるというところです。
体制といったときに、連携協働の体制も属人的なつながりから始まるのは大事なんですけど、やはりちゃんとカリキュラムレベルでしっかりとやってくために、ある程度組織対組織の連携協働が必要になってくる。それと、学校運営協議会とか、コミュニティ・スクールとか、いわゆる協議会をつくるだけの協議体制、この場も協議体制だと思うんですけど、口だけ、言うだけで、いろいろ会議で言うけど手足を動かさないとか、実際に金も人も何もなさないという、会議だけ参加する外部の人たちの会議を学校でやっても、学校は嫌がる。言われるだけ言われて学校におしつけられて。
そういう協議会も大事なんですけど、それをどう協働体制、共同体に進化させていけるのか。学校の目標ではなく、みんなで一緒の共有の目標・計画そして、実際に動く協働ですね、協働事業・活動、動くためには予算や資源というものも出し合ってやっていく。だからこそ一緒に評価もする。いわゆる会議だけの参加ではなく、プランもDの実行も含めて参画をしていくための体制というレベルになっていくと、全然違う次元の取組になっていくということころです。
学校とか教育委員会は教育のことだけ考えて教育振興のために外を使えればいいと思うわけですけど、関わる人たちは必ずしもそれだけが目的ではないというところで、教育の視点と地域側の視点の両方の掛け合わせを意識しながら協働していくというのが非常に大事です。一方のために一方を使うというのは持続可能ではない。
協働していく上で、中教審の審議会とかそういったところでも議論している中で、この協働体制をある程度しっかりとさらには進化させていくというと

きに、多くの日本の都道府県立高校なんですけど、その都道府県というのは広域で管理したり連絡調整するためには非常にいい単位だったりするわけですけども、実際１つ１つの学校や生徒や保護者などの現場に一番近いのは、都道府県より市町村だったりする。現場の声を聴いたり、柔軟で機動的に取り組みやすいというのは、都道府県という単位よりも実は市町村のほうが地域資源のことも知っているし動かしやすいということで、都道府県が持っている強みと市町村が持っている強みをハイブリッドで組み合わせた学校運営の形態というところをもっと柔軟に活用していくというのはこれからの１つの在り方だろうということで、まだやっているようなところはありませんが、都道府県立の学校で、運営の一部を市町村が運営していく、寮の部分を運営するとか、もしくは学校の運営自体を市町村がやるとか、新しい時代の学校の在り方というところではそういったものもあるのではないかなということを考えながら、今後もそういった議論も含めてしていけるといいのかなと思って紹介させていただきました。以上です。

事　務　局：岩本委員様ありがとうございました。ただいまの発表に対してご質問がありました、委員の皆さんお願いいたします。

委　　員：うまくいったところは顕著にあるなと思いますけど、ミクロの単位で考えると、結局はどういった働きかけというか影響が生徒さんにあったとか、ミクロ部分では何か、言葉掛けとかシーンとかどんなものがあったのかなと個人的に興味があるのですが。

岩 本 委 員：いくつかあるんですけど、１つは高校卒業時点までで、こういった地域で生き生きと働く多様な大人、ロールモデルとどれだけ出会えるかということが１つポイントで、こんなところに仕事はないとか、ここで生き生き自分らしく生きられないとか、仕事は都会のほうがきらきらしているというような、マスコミとかネット上ではそう見えると、それが、こんなところでもこんなことやっている人たちがいるとか、それだったらここでもできるんじゃないかとか、ここだからこそできるかも知れないっていう、１つはそういうロールモデルですね。あまりご年配すぎるとちょっとあれなんで、２０代、３０代とかだとなお良いですけど、卒業するまでに堪能なロールモデルと出会うというところと、あとはデータで見ても自分が何かにチャレンジしようと思っ

たときに、地域の人たちに受け止めてもらったとか、応援してもらったという経験がある子たちほど、愛着だとかが深いですよ。何やってんだとか、そんなことしてないで勉強しとけとかじゃなく、失敗するかも知れないけどやってみなよとか、応援された経験を持っていると、高校生たちはばかじゃないから自分が全部やったなんて思わないんですね。本当に育ててもらったとか、この地域に自分は愛されたとか応援してもらったとか、そういう人たちがいると、最後卒業するときにこの地域に対しての愛着や誇りとともに感謝があると、いつか恩返ししたいとか、次は自分がここまで育ててもらったから今度は自分が支える側になりたいとか、そういう思いが培われていくというところで、自分のために大切にされたという経験を、親や教員以外の人たちから受けていくということがすごく大事なのかなと思います。

委　　員：ありがとうございます。持続可能性のところもすごく強調されて、仕組みづくりだとかドライなところがありつつ、結局現場のウェットさを増やすためのドライというか、そこがすごく肝なのかなという印象を受けました。ありがとうございます。

委　　員：どうもありがとうございました。最後の県と市町村のハイブリッドモデルの高校の在り方というのは大変興味深く聞かせてもらっていました。

定性的な話は何度も聞かせてもらっているんで、岩本さんは１７年、１８年やってきて、ある程度定点観測的に見ていて、地元の定着率、京丹後市も９割が出て帰ってくるんで定着率的にも３割ぐらいだというような状況だということだけど、実際に岩本さんがずっとやってきた島根において定着率はどんな感じになってきたと見ていますか。具体的な数字があれば一番いいんだけど。

委　　員：県全体はまだ見れてはいないんですけども、島前ではUターンの若手の数は増えてきています。一方で、定性的ではあるんですけど、帰ってくる若者の、簡単に言うと、ちょっと言い方は悪いんですが、学歴が変わっているという感覚があって、要は専門学校に行ってすぐ手に職をつけて帰ってくる子たちだけではなくて、いわゆる四年制大学の国公立とかにも行って、東京に出てとかっていう、そういう子たちが帰ってくるみたいな、そういう資質的変化、長男だからしょうがなくとか親の介護でしょうがなくだけではなく、自らの

意志である程度の学歴がある子たちが思いを持って帰ってくるという子たちが中の割合として増えてきているという実感もありますね。

事　務　局：ありがとうございました。それではお待たせいたしました。会場のほうから中川委員の発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

中 川 委 員：株式会社 EdLog 代表取締役で、文部科学省の視学委員をしております、GIGA スクールの戦略担当です。簡単に自己紹介をさせていただきますと、長くマイクロソフトにいたんですけれども、マイクロソフトを退職したタイミングで小学校プログラミング教育が立ち上がるということで、文部科学省のほうに入省しまして、主に小学校のプログラミング教育を立ち上げていたんですけども、その途中で GIGA スクール構想が立ち上がりまして、いろいろと一緒に動かさせていただきました。

今は視学委員という立場で、少し文部科学省のアドバイザーとして関わりながら、港区教育委員会の教育情報参事官と、立命館大学と愛知教育大学で客員教授をやらせていただいています。

私は視学委員という仕事柄、たくさんの学校、特に GIGA スクールがどのように使われているのか、GIGA スクールを用いて学校教育がどのように変容しているかというのを視察しておりまして、今日は事務局のほうから GIGA スクールを使って学校がどのように回っているのか紹介してほしいと言われましたので、その話をさせていただこうと思います。

こんなこともあろうかと思って、ビデオがひょっとしたらすごくつながりづらいかなと思いまして、リモートでご参加の皆さんは画面に QR コードが見えていらっしゃると思いますので、スマホか何かで見ていただくか、YouTube で「Google Education 春日井市」というふうに検索キーワードを入れていただくと、これらの画像が出てくると思います。この画像は少し長いので、もっと短いものでいいものはないかなと思っていましたら、こちらの画像がありましたので、こちらの QR コードを読み込んでいただくかして、見ていただいたらと思いますので、流れるかどうか分かりませんが一応トライしてみます。

（動画視聴）

我々、IT による民主化って言うんですけど、マレーシアはまだ１人１台を実現できていないようで、つまり１人１票持っていないという状態で、使いま

わせばできるのかも知れないですけども、こういう道具があることによって、私も子ども時代そうでしたけども、なかなか手を挙げるのが恥ずかしくて当てていただけなかったりとか、変なことを言っているんじゃないかと気後れしてすることもあるんですけど、ここのクラスを見ていると子どもたちは自分の考えていることをしっかり発言し、良いのは、今まではタクトって最初に発表されましたけど、そのタクトを先生が持っていて先生が振ってらっしゃる授業を多く見るんですが、子どもたちがタクトを、イニシアチブをもっていて、自分が発表して、先生がそれを上手に裁くという側に回られているような授業を拝見することがあって、プレゼンテーションに戻しますけれども、GIGA スクールでは実際そういったことが起こり始めています。

この久川先生の授業は私も何度も見させていただいて、どういう授業かって言うと、先生がしゃべる時間を極力最小限にしようという努力をいつも考えていらっしゃって、黒板に板書して子どもが待っている時間も極力ないようにして、別にグーグルの宣伝をするわけでもなく僕は元マイクロソフトなのでどっちかって言うとあれですけど、上手にお使いになられていて、Google Classroom というポータルのような画面を準備して、今日の授業で何をするのか、大人も会議をするときに今日はどこまで会議で話さなきゃいけないんだっけというのが分からないといけないので事務方が次第を用意してくださるわけですけども、子どもたちも授業で今日はどこまで学ぶんだろうとか、自分はどこまで主役になれるんだろう、というようなことを見ながらやるんですね。

これは一昨年久川先生の授業で、学習用の動画が、デジタル教科書に付いている動画とか、あとユーチューバーの葉一さんという方がいらっしゃってすごく分かりやすい１０分ぐらいの授業をされるんですけど、それを授業の中にお使いになられるんです。教材研究して、これいいんじゃないかっていうことで子どもたちに投げて、今日はこんなことをやりますよと今日の授業の流れを、授業が始まった瞬間、「はい、GoogleClassroom を立ち上げて」と言うと、もう黒板への板書の時間はゼロ秒になるわけですね。子どもたちはどういう手順で学ぶかを理解していくということになります。授業が始まると、今日は比とその利用について、比を使って問題を解こうということが分かっ

ているので、必要な学習材を手に取って勉強して、分からなければ自分で動画を見るし、Google を調べるし、久川先生の顔をモザイクする必要はなかったんですが、集まって聞いて、クラス全体どういう状況かって言うと、一斉授業の寺子屋のように前のほうで始まりつつ、１人で学びたい、自分のペースで学びたいという子は、真ん中で学び、この子は算数がすごく得意だし、私に分かりやすく説明してくれるからと言って、サイドバイサイドしに行って、ということが教室の中で起こるんです。最初見たときに、わっと子どもが動き出すので、崩壊しているのかなって心配になるんですが、ぼうっとしている子どもは１人もいない。子どもたちは授業が終わったあとに「ああ疲れた」という状態なんですね。我々大人もそういう会議をしたいですよね。ということが実際に起こっていて、デジタル教科書も使うんですが、デジタル教科書をコピーペーストしてメモをつくって、今日の授業のノートから人に説明するときの資料を、もちろん手で書くノートもすごく重要で、それの意味ということと、それと、共有してほかの人にもお知らせしたいというような場合にはデジタルを上手に使う。全部デジタルにするということがいいということではないんですけど、デジタルにして自分の考えを発表すると、「中川くん、考え方ちょっと違うんじゃない」とか、「僕はこんな考え方をしたよ」というのをチャットでみんな仕掛けてくるんですね。よく教育委員会で特に学校でチャット禁止っていうケースがあるんですが、もちろんご事情もおありで尊重しますが、大人のルールで禁止するのは簡単ですが、どうやって緩めていって子どもたちに使わせてあげるかというのを考えたいですね。これができたらみんなで使おうね、このハードルを乗り越えていったら使おうね、というようなことをやる必要があって、この学校ではそれができていて、他者参照と言いますけれども、本来自分でノートをつくったり、相当仲良しで貸してあげないと見えないんですが、クラウド上に自分の考えを共有していけば、教育の協働というのが起こります。

これは別の学校ですけれども、中学校の数学の授業でしたが、自分が理解したことをまとめましょうということでスプレッドシートに書いていると、僕は明るいカンニングと言っているんですが、ほかの人がどう考えているかが見えます。私も実際学校でそうだったんですけど、先生の指示が実はよく分

からなくて、先生がこうしてくださいといったときに「何したらいいんだろう」とぼうっとしていると、先生が机間巡視していただいて「今これの時間だよ」って言われてはっと気づくということがよくあったんですが、これだとクラウドを見ると人が何をしているとか、自分より上手にまとめたな、っていうことが、これは教育上、のっかりにならないように状況に合わせて使い分けていただくのが適切かと思うんですが、分かりやすくそういうことが起こっているということですね。

自分の考えを表出していくことができますので、手を挙げて当てられた子だけがではなく、全員が発言するのでやった感があって、全員タクトを持っているという状態になっています。

いわゆる学習の、我々ぱっと物事を聞いたときにワーキングメモリーから短期メモリーぐらいまで持って行きつつ、できれば長期記憶に持って行きたい、なかなか忘れない大事な記憶に持って行きたいんですが、それって実は何度も繰り返してもあまり長期記憶には移行しないという研究結果もあるようで、今日先生方もいらっしゃるのでいろいろと教えていただけたらと思うんですが、一つはテストをして、テストによってトレーニングして、テスト効果で長期記憶に持って行くということと、ディスカッションをしていくことによって、体験を自分のものにしていくことで、皆さんもそうだと思います。人から聞いたことは忘れるけど、実際にやってみたことってなかなか忘れづらくなってということがあるので、そのためにもアクティブラーニングが非常に効果的なんだろうと思います。

GIGA を導入したときに実は学習の内容に関するものと、学習の基盤になるものと、両方上手に手配していく必要があると思っていて、よくあるのが、私も GIGA スクールを立ち上げた視学委員なので呼ばれていて、「中川さんうちの学校はすごい GIGA 使ってるでしょう」って言って、AI ドリルが悪いわけじゃないんですけど AI ドリルを使っているところを見せられるんですが、「それはお家に帰って子どもがやりたいというような教育をされたらどうでしょうか」というのを上手に伝えるのにすごく苦労するんですが、実はそれぞれのコンテンツは転用が不可能で、それぞれの学年、単元、教科に応じて１つずつ用意していく必要があると思っています。これは先生の教材研究として

ご努力されるところですごく大事なことなんですが、でも一番大事なことは汎用性があって、使いまわせる。子どもたちが自ら考える。与えられたものをやることではないと考えると、実は学習の基盤の部分ほど重要だというふうに考えていまして、学習の基盤の上に各コンテンツが乗っていくようなレイアウトにしていきたい。

この先生はすごく優秀な先生で、これからこの地域で立ち上げようということなので、この先生がだめだという意味ではないという大前提でお話すると、実はNHK for School のビデオクリップを皆さんにご紹介して、小学校５年生の鴨川の水質汚染、わたしたちの暮らしとかいう東京書籍の教科書で、それに連動したNHK for School のビデオクリップを何度も用意して、鴨川に興味ない人もいるじゃないですか、我々多くの関西人は鴨川でいろいろデートしたなとか思い出がありますけど、行ったことのない人は興味がないので、僕はイタイイタイ病の方が興味があるとか、いろんな方がいるだろうと思って、コンテンツを用意して授業を展開してみましたというケースです。

公害には騒音とか水質汚染とかいろいろあるので紹介しながら、そのビデオを見てねと言ってきます。ここまでずっと先生がタクトを持っていて、指導のベクトルは教師から子どもたちに向かっています。ここからこのビデオクリップは個別指導に入ります。子どもたちが「僕はイタイイタイ病に興味がある」とかいうような形で、たくさんあるビデオクリップの中から自分の興味がありそうなビデオを見ていく形になる。とてもいいですよね。ビデオですから自分のペースで止めたり、進めたり、まとめていって、何度もリプレイしながら、紙にまとめるんですね。

紙でまとめること自体悪くないんですが、このあとの活動は何か我々はすごく意識する必要があって、何をするかと言うと、先生は「はい、みんなが考えたこと教えて」って手を挙げて発表させるわけです。まあ普通の授業ですよね。これまでこれで良かったんですけれども、今は１人１票持っているんです。最近民主化して。子どもたち全員違う教材を見て、自分の考えがあるんです。でも４０分の授業の中の最後のまとめの１０分で全員の意見を聞き出すことは人間の能力では不可能です。この先生は相当優秀なので、板書に子どもたちの意見をまとめるんですが、かなり優秀な先生がこの授業において

この中でボトルネックになっています。全員の意見を引き出せない。先生のまとめる能力に依存するということになるわけですね。もしここが最初に見た春日井市の授業のように、全員が発表資料をつくる、スプレッドシートに正規化された意見を述べていくというような形をすると、授業が全員自分がやったことになるわけですね。

そのような授業に展開するためには GIGA スクールがまず使って慣れるというところです。もう３年経っていますから京丹後市は徐々にできつつあるかなと思っています。これは特殊な何とかツールを使って、一斉授業を強化するようなやり方に持ち込むケースが多いんですが、子どもたちの画面を全部キャプチャーして見るとかですね、それは別に４０人ぐらいならしなくても大丈夫じゃないかなと私は思っています。むしろ先生が個別の教材研究をされて、みんなにプリントを配る時間もゼロ秒で済むわけですから、ボタン１個でやればいいんですけども、一番何よりも大事なことは、その子どもたちの考えていることといういのをクラウドツールに引き出してやって、できればまとめるのも子どもたちにやらせて、先生は、そのまとめ方ってどういう考え方なのか、本当にそれでいいのかなみたいな足場かけ・足場外しということをしていかれるといいんじゃないかな。

今日の議題が人物像とか組織像ということなので、我々ビジネスパーソンが例えばチームメイトや部下がいたときに、細かい指示をして思い通りにやってくれとすると、たぶん私の能力以上の組織はできない。私の能力以上の人材はできない。それよりも、相手方に大きなゴールはここなので、こういうものに向かってやっていこう、そこだけコミットアグリーということで、合意を得ながら、細かい指示はしないで、時として子どもは迷いますから、部下も職歴が浅いと迷いますから、そこにアドバイスをあげられる存在でありたいなと思うんですね。私も助けられないことが多いので、チーム同士で助け合う、これが地域の、少しくさいですが友情というか、「地域に入って来られたんだな」っていうことになるかなと思います。組織という考え方でも、細かい指示をたくさんすると、チームというのはシングルな作業ができますが指示を待つような組織になります。しっかり自ら考え仲間同士が助け合うようなチームというのをつくる。そういった教育に GIGA スクールは個別、文

部科学省用語で言うと「個別最適な学び」というのはそういうところを目指していて、今日画面の向こうで聞いていらっしゃる先生方は「そんなことは当たり前だよ」と若干眠くなってしまったかも知れませんが、こういった学校をたくさん増やしたいんですが、なかなかまだ最先端がこの学校ですというような状況なので、ここを京丹後でやり、京丹後で学んだらイニシアチブ、タクトを自分が持っているんだと子どもたちが思えるような教育のお手伝いをしたいなと思って今日発表させていただきました。ありがとうございます。

事　務　局：中川委員ありがとうございました。それでは発表に対してのご質問がございましたら、お願いいたします。オンラインで参加の皆さんいかがでしょうか。

委　　員：中川さんどうもありがとうございました。とても勉強になって、すごく刺激的な話でした。

１つ質問で、後ろから３枚目ぐらいのスライドで、「使う・慣れる」から教師主導型と生徒主導型の２つに分かれてく、あの分岐はいったい何によって上のほうに行くのか。それが個人の好き嫌いとかタイプだけじゃなくて、学校全体が上に行くときの要素とか、何をしておけばみんなが上のほうに行くのか、ポイントとか環境づくりとか、教えていただけたらと思います。いかがでしょうか。

中 川 委 員：先生方からお聞きした情報で言うと、子どもたちを信頼してその道具を渡してしまうということをしないで、ずっと先生がイニシアチブを持ち続けると、子どもたちにやらされ感が発生してしまって、言い方が難しいんですけど、一斉授業をすごく上手にやられて、一斉授業という括りも適切なのかどうかということもあるんですけれども、ICT を使わなくても巧みな先生が子どもたちのモチベーションをうまく引き出すケースというのはあるようですが、せっかく道具があって個別にもできるので、子どもたちに渡してしまうというようなことをされるという、子どもと教師の信頼感というのは、先週の土日に教育懇話会の全国大会があって、そこで仙台錦ケ丘小学校の先生がそのようなことをおっしゃっていて、ああそこだなと思ったことと、あとは学習観と言うか、指導観と言うか、今までは受験に成功すれば人生がまあまあ明るいということで、授業を一生懸命聞いて記憶をしっかり経験させる努力をすれば報われるというところがあったのですが、今は自分の生きがいとか、

自分の情熱というところが非常に重要になってきていて、受験勉強を一生懸命やって成功したから人生が幸せになると多くの子どもたちが思っていないというところから、学習観とかを変えていくというところで、ここで先生が「俺には腕があるから」と言って図の下に行かれたときに、それでも子どもたちのモチベーションが上がればいいんですが、教師主導というのがどうしても出てくるというのがあるのかなと思って、ちょっとこれは私が ICT 出身からこっちへ来ているので、いろいろなご意見がおありになると思いますが、私にいただいた質問の答えとさせていただきます。

委　　員：ありがとうございました。岩本さんも、この議論多分加わっていたんで、それをもとにお話ししていると思うんですけど、私も中教審やっているときに議論していたんですが、結局その先生のリテラシーがある程度共通、要するに差が出ないようにするにはどうするかとう議論がかなりあったと思うのですけど、先ほどの話を聞くと、結局差が出てしまって、それに対して先生たちの学び直しの機会をどうするんだっていうところが、GIGA スクール導入当初から非常に懸念されていたんですけど、そこのところはまだこれからという感じなんですかね。

もう１つは、先ほどから出ている高校との連携をどう考えるかという議論も当時からされていたんですが、結局 GIGA スクールは、１人１台パソコンは義務教育では実現するかも知れないけど、高校のほうでそういうふうになっているわけではないので、そこのところをどうつないでいくんだという議論はあったはずなんですよね。

中川さんのお知りになっているところで結構なんですけど、先生方のリテラシーを上げていくための方策として、学び直しがどのぐらいやられてきているかとう話と、義務教育と高校教育との連携の話でもし知っていることがあれば教えていただければと思います。

中 川 委 員：ありがとうございます。まず大前提として、私がお示ししたのが１つの例で、教育って１つの型でこれをやれば間違いないというのはどうやらないようで、学級の状況によって先生はいろんな引き出しを持つ、その１つの引き出しだという大前提でお話すると、今私がお示ししたような IT を使って子どもたち全員のアイディアや意見を聞き出すという引き出しは、これまでは装備され

ておらず、なので私は愛知教育大学に入らせていただいて、教員養成の現場から、GIGA スクールに対応した教員というのを引き出しの１つとしてやろうぜということをまずやり始めているところで、私も文部科学省にいるから言い方が難しいんですけれども、正直ここはコロナの影響もあってまず GIGA スクール、学びの環境を整えなければいけないというところからスタートしたので、本当であればもう少し綿密に先生方にご準備いただいてというふうに階段をつくってやっていく必要があったのかなと思うんですが、とは言えコロナは誰にも止められなかったし、IT 日本が遅れていたのは実は、世界で日本が断トツ、ナンバーワンなんですよ。なので日本型の ICT を使い、かつ日本の教育の強みをそこへ併せ持ったようなモデルをつくる絶好のチャンスかなと思っていて、いろんな型があっていいと思うんで、京丹後モデルというのをしっかりつくり、教育委員会は教員研修もしっかり充実させていきながらやっていかれるように、私もお手伝いしたいなと思っています。

事　務　局：ありがとうございました。それでは３人の委員の方から発表をいただきました。さらに質疑もしていただいて、議論が深まったと思います。途中トラブルがありまして本当に申し訳なかったと思います。本当でしたらこのあと議題の３のところで意見交換をさせていただく予定だったんですが、時間があと１０分となりましたので、今日、お三方からの発表本当に、GIGA スクールは我々の地域だけでなく全国的に今後活用は必須となってきますし、アントレプレナーシップ、また地域協働というところは本市にとって本当にぴったりとくるテーマだと思います。

このお三方の発表に対してのご質問やご意見を残りの１０分間で深めていくということで今日はお願いしたいと思います。発表に関連してご意見ありましたらお願いします。まず会場の方でいかがでしょうか。

委　　員：ありがとうございました。的外れな質問かも知れませんが、先ほどのお話を聞いて、特に僕はアナログなほうでこうったものは使いこなせないので余計に思ったのですが、生徒さんの中で、使いこなせる子や使いこなせない子などのそういうレベルとかはどうなのかなというのと、先生も使いこなしたり取りまとめたりする能力とかいうことで考えると、その差とかはどうなんですかね。

中 川 委 員：聞こえていなかったかも知れないので復唱しますと、GIGA スクールが進んで差が生まれてくるというふうに考えたときに、子どもたちの ICT に関する習得能力と、先生たちの ICT に対する習得能力に差が出るんじゃないかというご質問です。

まず、子どもたちについては、本当に短い期間ですぐにキャッチアップしてきます。なので、触る機会さえ提供してあげれば、すぐにキャッチアップしてきます。

大変なのは先生方で、授業しないといけないところで認知負荷がかかっているのに、新しい道具を用意するということが必要になってくるので、ここにはすごく差が生まれると思います。

これは私も文部科学省で、どうやって推進をしていけばいいんだろうなということでいろんな方々と意見を出し合いながら出している事例としては、職員会議で使っていただくということをすると。子どもの前では失敗できないじゃないですか、すべきじゃないと思うので、してもいいかも知れないですけど、まず職員会議とか中の会議で、今まで一方的に伝えていた校長先生のお話を、当番制で誰かがメモをするとか、チャットで言ったことをこういう理解でしたと全員出してみるとか、そういう使い方をすることでキャッチアップした学校の事例というのがあります。

私、山を登るときに「使う・慣れる」と書きましたけど、実は先生方もそういう「使う」ということをしないと、いきなり授業の中に持っていくというのは、練習していない舞台を人に見せるようなものでかなりリスキーなので、そういう意味でも職員会議の中で利活用するということが大事ではないかなと思います。

事　務　局：ありがとうございました。会場内の方よろしいですか。

そしたらオンラインでご出席の委員の皆さんから是非あと２人ぐらいご質問、ご意見お願いいたします。いかがでしょうか。

委　　員：３人の発表者の皆様、貴重なお話ありがとうございました。

私は今、情報経営イノベーション専門職大学という専門職大学に勤めておりますが、今お話しいただいた内容は、小学校、中学校、高校でのお話だったかと思うんですが、どのお話も全て大学にも共通しているなということをすご

く感じました。

最初の長井様のお話、アントレプレナーシップの育成というか、そういったマインドを持たせようということだと思うんですが、我々イノベーション専門職大学はイノベーターの育成というのを１つの目標にしていまして、具体的な例で言うと、起業するとか、会社に入って新しいサービスやビジネスを生み出すというイノベーターを育成するという学校で、とても共通した問題意識だなと感じました。

また、岩本様のお話の中で、地域の課題が生きた教材だというお話があったと思うんですが、我々は東京都墨田区で大学を運営しているんですけど、大学の近くの墨田の地域の課題を学生たちと一緒にいろいろなプロジェクトをつくって解決するというのを取り組んでいまして、それこそまさに教育かなというふうに感じております。

中川様のお話では、深い学びにつながる手法としてアクティブラーニングというふうなお話があったと思うんですが、我々の大学ではほぼ全ての授業がアクティブラーニングということでやっています。IT の活用、リテラシーもですけど、アクティブラーニングをどうやってやるかというところも、教員側のほうも非常に大きな問題になっていて、それをいろんな研修をやったりして日々研鑽を積んでいくというような状況でした。非常に相通ずるものがあるなということでお話を伺っていました。以上です。ありがとうございました。

事　務　局：古賀副学長様ありがとうございました。ほかの委員さんいかがでしょうか。竺沙先生よろしいでしょうか。

委　　員：ありがとうございました。感想を簡単に申し上げたいと思います。それぞれ非常に面白いお話をお伺いできて、非常に興味深かったです。

長井委員のお話の中で、グローカル人材というところで、グローバルは外へ、ローカルは内へという、そういう見方をされていましたし、アントレプレナーというのが間だという、そういう捉え方というのが非常に興味深かった。そこがポイントだなと思いました。

岩本委員のお話で非常に興味深かったのは、×（かける）ということで捉えられたところですね。学校×地域、生徒×社会、地者×外者、こういう発想で

見ていくんだなというところの面白さをすごく感じました。

中川委員のお話では、授業観とか学習観、指導観というのを考えさせていただく、そういうお話だったかと思いますし、GIGA スクールというのはそれをしっかりつくれないと流されてしまう恐れがあるなということをすごく感じましたので、そういったことを考えさせていただくお話を今日伺えたかなと思いました。

それぞれの委員の皆さんがどういう見方をされているかというところが非常に刺激的で、そういったものをしっかり学ばせていただきたいなと感じました。ありがとうございました。

事　務　局：竺沙先生ありがとうございました。

そうでしたら、時間となりましたので、今日の会議は以上とさせていただきます。途中、通信状況の関係でご迷惑をお掛けしました。特に３人の発表いただいた委員の皆さんにはご迷惑をお掛けしましたけども、非常に参考となる貴重なお話をいただきまして、皆さんからも質疑をいただいて、中身がすごく深まったことでちょっと救われたかなと思っています。本当にありがとうございました。

今日、ご意見をいただく予定でした資料１の共通認識及び検討事項というところで、本市が目指す教育・人材育成像の方向性ですとか、今後の検討事項の（案）ということで３点ほど提起をさせていただきましたので、これにつきましては今日のお話も踏まえましてご意見お寄せいただければと思いますので、メールでご意見を頂戴するというようなことで、事務局のほうからも連絡を差し上げたいと思いますので、是非ご意見ありましたらお寄せいただきたいと思います。

次回の予定は４月２５日ということで資料３に書かせていただいています。また、次回からは検討会という形で新たにスタートするということで考えておりまして、中高生からの意見聴取だとか、先進地視察なども４月の会議以降、前後して行いたいと思いますし、年間のざっとした予定を示させてもらっていますので、このあたりまた今後さらに詳細を詰めてご案内させていただきます。改めて３人のご発表いただきました委員の皆さんに最後お礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。